

論文

## 幼児の描画活動における想像性に影響を及ぼす保育者の関わり

The Effect of Childcare Strategy on Imagination of Kindergarten Children in Drawing Activities

玉瀬 友美 (高知大学教育学部)<sup>1</sup>桑田 美摘 (しんとよす保育園)<sup>2</sup>TAMASE Yumi<sup>1</sup> and KUWATA Mitsumi<sup>2</sup><sup>1</sup> Faculty of Education, Kochi University<sup>2</sup> Shintoyosu Nursery School

## ABSTRACT

The purpose of this study was to examine the effect of childcare strategy on imagination of kindergarten children in drawing activities. Twenty-one 6-year-old kindergarten children were divided into the directive strategy group (N=10) and the supportive strategy group (N=11). The children in directive strategy group were presented with model stimulus, followed by an abstract stimulus to instruct them to draw something. And during the drawing activities, the investigators gave them limited words about the paintings they were drawing. The children in supportive strategy group were given an abstract stimulus and were instructed to draw something. And during the drawing activities, the investigators gave them words for expanding an image about the paintings they were drawing. As a result, there was no significant difference in the number of colors used by the children for drawing and the number of sheets of paper drawn by the children between the directive strategy group and the supportive strategy group. However, the time that the children in the supportive strategy group drew was longer than that the children in the directive strategy group. From these results, it has been suggested that the imagination of kindergarten children in drawing activities has spread by encouraging the spread of the image from the picture drawn by the children.

## I. 問題の所在

幼児は庭に落ちている1枚の葉っぱを皿に見立てたり、長く繋げた積み木をズボンにはさんで剣に見立てたりして遊ぶ。このような子どもたちを目の前にして、それぞれの独自性をもつイメージを豊かに引き出し、イメージの世界の中でのびのびと活動できる場を導く保育者の関わり方とはどのようなものであろうか。

幼稚園教育要領において、領域「表現」は、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」領域であると規定され、「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」等のねらいが示されている(文科省, 2018a)。保育における造形活動においては、保育者は幼児の表現したい思いや意欲を受け止め、幼児が感じたことや考えたことをイメージ豊かに表現できるよう、環境を構成し、支援することが求められる。

幼児の造形活動における想像性と保育者の関わりについて、若山(2007)は、3, 4, 5歳児を対象とした造形活動中に観察された幼児の発話内容を、保育方略にもとづいて比較し、検討した。ここでいう保育方略とは、Bresler(1993)が小学校での造形活動を展開するにあたって教師がもつと指摘している3つの方略、すなわち「モデル提示型方略」「概念くずし型方略」「見守り型方略」に対応するものである。

モデル提示型方略は、造形活動に必要な表現技術の獲得やモデリングあるいは制作により何らかの目的達成が目指され、モデル刺激を提示して「これ何?」「それであってるよ」など、答えが明らかな質問をしたり、幼児が現に描いている絵について示範的な言葉をかけたりする方略であり、概念くずし型方略は、典型的な視点から脱却し新しい視点でものごとを捉えたり、今現在持つイメージや知識、経験を新しく作り変えることが目指され、モデルとなる刺激は提示せずに「何かに見えてこない?」といった、幼児が現に描いている絵からイメージの広がりや導く保育者の発話が特徴的な方略である。そして、見守り型方略は、子どもが自身のイメージや考えを想起し表現すること等が目指され、「なるほどね」といった、活動を支援する保育者の発話等が特徴的な方略であるとされている(若山, 2007)。

その結果、示範的な発話が特徴的なモデル提示型方略では、何を作るか、どう作るかの答えが保育者によって用意されており、その答えに沿うように幼児が活動し、発話数も最も少なかったこと、概念くずし型方略では、幼児は提示された刺激への新たな意味付けをしたり、形みつけをしたりする様子がみられ、造形的なイメージの広がりを導く発話カテゴリーは主としてイメージ探索的発話であったこと、見守り型方略のみでは幼児・児童を造形的なイメージの広がりへと導く十分な条件を持ち合わせていないことが報告されている(若山, 2007)。このことから、造形活動における幼児のイメージの広がりには、示範的関わりではなく、幼児のイメージ探索を支援する関わりが望ましいと考えられる。

若山(2007)では、幼児の発話内容に注目しているが、保育者の関わりが幼児の造形的なイメージの広がりやに影響を及ぼすのであれば、発話以外の幼児の造形活動にもその影響があると考えられる。

「子どもは、絵をことばのように用いる」と言われる(ワロン, 2001)。

ことばによって自分の思いや考えをまだ十分に表現できない子どもの知的発達を調べる方法として、グッドイナフは描画法による知能検査を開発した(Goodenough, 1926)。その後、大人や子どもを対象としてさまざまな描画法が開発され、知能検査や人格検査としてだけでなく、クライアントの感情や思いを調べる検査手法として広く用いられている(日比, 1994)。幼児の描く絵や描画行動には、幼児の想像性が反映されることが予想できる。

本研究では、モデルを提示して示範的な言葉かけを行う示範的関わり群と、モデルを提示せずイメージ探索的言葉かけを行う探索支援的関わり群を設定し、描画活動においてみられる幼児の想像性に保育者の関わりがどのように影響するかについて実証的に検討する。

## II. 研究の方法

### 対象児

高知県内のA幼稚園年長クラスに在籍する21名の幼児(平均年齢6歳0か月:範囲5歳6か月~6歳6か月)を、示範的関わり群10名(男児4名、女児6名)と探索支援的関わり群11名(男児4名、女児7名)に分けた。

### 材料

対象児に提示した「手形意味づけ刺激」をFigure1に、「手形刺激」をFigure2に示す。いずれも、A4サイズの用紙に白黒印刷したものであった。



Fig.1 手形意味づけ刺激



Fig.2 手形刺激

描画材料として、Pentelサインペン12色セット(水性インキ:S520-12C)を使用した。色は、黒、赤、青、緑、茶、橙、黄、灰、桃、水色、紫、黄土であった。

### 手続き

調査は、A幼稚園内の静かな部屋で個別に実施した。調査はすべて第2著者が行い、机をはさんで調査者と幼児が向かい合って座った。幼児の描画活動中の様子はビデオカメラを用いて撮影した。なお、第2著者は、教育実習生としてA幼稚園の幼児と関わった経験があったため、調査中、対象児からは「○○せんせい」と呼ばれていた。

示範的関わり群では、手形に絵を描き加えて海で泳ぐ魚を描いた手形意味づけ刺激(Figure1)を幼児に提示し、それが何に見えるのか聞いた。そして、手形刺激(Figure2)を提示し、「○○ちゃん(○○くん)もこの手形に何か加えて絵を描いてみよう」と教示した。描

画活動中には、「～を描いてみたらどう？」などの示範的言葉かけや、「それは何？」「海には魚がいるね」などの限定された答えがあるような言葉かけを行なった。

探索支援的関わり群では、「手形刺激」(figure2)を幼児に提示し、それが何に見えるのか聞いた。そして、「○○ちゃん(○○くん)もこの手形に何か加えて絵を描いてみよう」と教示した。描画活動中には、「何かに見えてこない?」「どんなお話がある?」など、幼児がイメージを探索することを支援する言葉かけを行った。

両群において、自由な雰囲気の中で幼児自身が自分で決定のびのびと活動することができ、自分の作品が価値のあるものだと感じることができるよう、「すてきね」や「なるほどね」などの見守り、受け止め、受容を表す言葉かけは同様に続いた。また、描画活動の最後には、「すてきな絵が描けたね」と受容し、自分の絵に対する肯定感や、描いた達成感を味わえるよう支援した。

なお、1枚を描画した後、さらに描きたいと申し出た幼児には、新しい手形刺激を与えて希望する枚数を描かせた。

#### 倫理的配慮

園児の描画活動中のビデオ撮影について、当該幼稚園の園長に、研究目的、研究方法、研究内容、研究対象者の個人情報保護、研究協力の任意性と撤回の自由についての説明を行い、承諾を得た上で調査が行われた。また、当該幼稚園は教育・研究園であり、プライバシーの十分な保護の上で園児の行動の記録や園児が制作したものなどを学会等において発表することについて、保護者からの文書による承諾を事前で得ていることを確認した。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 描画で使用した色の数

描画で使用したサインペンの色の数の群ごとの平均と標準偏差をTable1に示す。t検定を行なった結果、有意差はみられなかった( $t(19)=.50, ns$ )。

Table1 描画中に使用した色の数の平均と標準偏差

	平均	標準偏差
示範的関わり群	5.70	3.16
探索支援的関わり群	6.27	2.05

#### 2. 描画した枚数

描画した枚数の群ごとの平均と標準偏差をTable2に示す。t検定を行なった結果、有意差はみられなかった( $t(19)=1.54, ns$ )。

Table2 描画した枚数の平均と標準偏差

	平均	標準偏差
示範的関わり群	1.10	0.32
探索支援的関わり群	1.45	0.69

#### 3. 描画にかかった時間

描画枚数については群差が見られなかったが、2枚以上描画した幼児は示範的関わり群で1名であるのに対して探索支援的関わり群では4名みられた。そこで、描画にかかった時間を分析した。Table3は、描画時間(秒)の群ごとの平均と標準偏差を示したものである。t検定を行なった結果、有意差がみられた( $t(19)=2.60, p<.05$ )。探索支援的関わり群は示範的関わり群よりも描画活動にかかる時間が長いことがわかった。探索支援的関わり群の幼児は描きたいイメージが広がり、それを表現するためにより多くの時間がかかったと考えられる。

Table3 描画時間(秒)の平均と標準偏差

	平均	標準偏差
示範的関わり群	355.5	184.72
探索支援的関わり群	765.0	465.78

#### 4. 見立て絵の内容

##### ①示範的関わり群

示範的関わり群では10名中9名が「マンボウ」「さかな」「くらげ」「たこ」などの魚類に見立てて描画し、1名が「飛行機」に見立てた。モデル刺激を見ながら「せんせいのと同じのかきたい」と言い、描画をはじめたA児のように、提示されたモデル刺激とほぼ同じ絵を描いていた幼児は3名みられた。B児も、調査者からの事例提示的言葉かけを聞いて、モデル刺激と同様の絵を描いていた。

B児：(モデル刺激をしばしば見ながら描いている)  
 調査者：「海の中の世界を描いてみたらどう?」  
 B児：「海って何があるっけな」  
 調査者：「海にはくらげとかたことかいかとか魚とかいるね」  
 B児：「くらげいる」

一方、見立て絵の内容は魚類ではあっても、イメージを広げて描画している幼児もみられた。C児は、くらげに見立てて絵を描いたが、モデル刺激から貝や魚、海藻こんぶ、サンゴ、とイメージを広げていた。

調査者：「これは何?」  
 C児：「(モデル刺激を示しながら) こういう海藻こんぶ」  
 「何かこうかなー。あ! そうだ貝かく」「魚かこう」  
 「サンゴも!」「○○(自分の名前)の思ったサンゴはこんな感じ」「テーマは金メダルと銀メダルのうけあいあり」

また、モデル刺激と関連しない「飛行機」に見立てたD児の絵には、タイヤ、ドア、ライト、翼なども描かれており、その周りには木やバスといった風景が加えられていた。「木ってこんなにでっかくて僕の町にはこんな丸いのがついてるんだー」とD児の既有知識と絵とが結

び付けられていた。

D児：「飛行機にしよう」  
 調査者：「飛行機ってどこ飛びゆう？」  
 D児：「空」

## ②探索支援的関わり群

探索支援的関わり群において、11名中5名は「くらげ」「たこ」「金魚」などの魚類を描き、その他の6名は「ネックレスおき」「植物」「ぞう」「ユーフォー」など魚類以外の絵を描いた。「たこ」に見立てたE児は、調査者のイメージ探索的言葉かけを聞いて、たこが散歩していることや、さらにはどんなどころを散歩しているのかを連想し、それを絵に表すことができていた。

調査者：「たこさん今何しているところ？」  
 E児：「お散歩しているところ」「(草を描きながら)これで、こっち側がこうなってこっちが海」

魚類以外の見立て絵を描いた幼児についてみると、F児は、まず1枚目で刺激図がネックレス置きに見えるといい、さらには2枚目も描き、「びしっぴしっぴして伸ばしたら変な宇宙人に見える」と2枚の見立て絵を完成させた。そして、2枚の見立て絵に関連性を持たせたお話を作っていた。

調査者：「どんなお話があるのかな？」  
 F児：「(2枚の絵を持って、1枚目を見せながら) こうだったでしょ、その次変身してこうなる (2枚目)。ネックレスのが変身する」

また、「植物」と見立てたG児は、にんじん、いも、きゅうり、草などが土に埋まっており、バツタがその野菜を下から取ろうとしている様子や、人が乗っている船が海に浮かんでいる様子、そして、ハチがハチミツを吸いに来た様子が1枚の絵に描かれ一連のお話が作られていた。

調査者：「この絵の中にどんなお話がある？」  
 G児：「バツタがこれ (にんじん) を食べて、これ (いも) も食べたりしてきゅうりを食べたりして船に飛び込んだりして、バツタがびょーんって。ハチがハチミツを吸いに来た」

H児は、「この形何かに見えてこない？」という保育者のイメージ探索的言葉かけから、「ユーフォー」を連想し、さらに自分の中にあるイメージを引き出して絵に表現していた。

調査者：「この形何かに見えてこない？」  
 H児：「ユーフォーに見える！おめめ描く！かわいくする！」  
 調査者：「ユーフォーさんはそれ何しているところ？」  
 H児：「あそんでいるところ」  
 調査者：「何をして遊んでいるの？」  
 H児：「にらめっこして負けた」  
 調査者：「にらめっこで負けちゃったのか。ユーフォーの周りって何かあるっけ？」  
 H児：「あ！まっくらやみにしてお星さま描く！」

## IV. 考察

本研究では、描画活動においてみられる幼児の想像性に及ぼす保育者の関わりの影響を実証的に検討した。

描画の際に幼児が使用した色の数や描画した枚数については、示範的関わり群と探索支援的関わり群に有意差はなかったが、描画活動にかかる時間については、示範的関わり群よりも探索支援的関わり群の方が長かったことから、モデルを提示せずイメージ探索的な言葉かけを受けることによって幼児のイメージが広がったことが示唆された。また、描かれた見立て絵の内容をみると、示範的関わり群では大部分の幼児がモデル刺激と同様の見立てを行っていたのに対して、探索支援的関わり群の幼児は多様な見立てを行ったり、描いた複数の絵に関連性を持たせてお話を作ったりする傾向があったことも、モデルを提示せずイメージ探索的言葉かけを受けることが幼児のイメージを広げていると考えられた。予めモデルを提示して限定的な問いかけをするような関わりではなく、多様な意味づけが可能な刺激を提示してそこから自由に連想しイメージを探索することを支援する関わりが、イメージの世界の中でのびのびと造形する幼児の活動を導いたといえよう。

前村(1999)は、保育現場における造形活動について、すべての材料が半完成品であってはならないというわけではないとしながらも、ほとんど完成品に近い教材を子どもに与えて造形活動が展開されるといったことも行われていると述べ、「おとなはついで『小さく描き直したら』と言ったり、あるいは『紙を継ぎ足したら』などと結論を先に示して、子どもが創造的に考えるチャンスをわざわざ奪い取ることやその逆のことは行い、「おとなの願いとは裏腹に子どもに創造性も自発性も育っていないことに気づかないまま見過ごしていることもないわけではない。」と指摘している。

幼児教育において教師が果たす役割には、「活動の理解者としての役割」「共同作業者としての役割」「モデルとしての役割」「遊びの援助者としての役割」があるが、このうち「モデルとしての役割」については、「先生のようにやってみよう」という幼児の思いが、事物との新たな出会いや遊びへの取り組みを促すことや、教師は自らの言動が幼児の言動に大きく影響することを認識しておくことが大切であることが解説されている(文部科学省, 2018b)。

保育者が楽しそうに活動する姿に引き付けられて幼児がその遊び

を始めることは保育においてよく見られる光景である。また、新たな活動を始めるにあたって、それに見合った技術や知識が必要となり、時に保育者がモデルを示すこともあろう。そのような場合であっても、活動に対する幼児の興味、関心が高まり、主体的な活動が開始されたならば、そこからは、保育者のモデルに沿うのではなく、幼児独自のイメージの広がりをもった主体的な活動が展開されるよう、保育者は支援することが重要であろう。

造形活動におけるモデルとしての役割について保育者が認識しておくべきことは、活動の目標を速やかに達成させるために提示したモデルを幼児に模倣させることではなく、保育者が示すモデルやそれへの模倣を促す言葉かけが幼児の想像性を抑制する可能性があることを理解した上で、活動のねらいや幼児の活動意欲およびその方向性をよく見極めて、モデルとしての自らの言動をコントロールすることではないだろうか。

本研究では、モデルの提示や言葉かけといった保育者の関わりが幼児の描画活動における想像性へ及ぼす影響を検討したが、それぞれの要因の影響については明らかではない。また、幼児の造形活動におけるイメージの広がりには、保育者との信頼関係やそれまでの造形活動の質と量、活動時の環境構成、あるいは幼児の特性など、保育に関する様々な要因が関わっており、それらの条件によって、保育者の関わりが幼児の造形活動における想像性に及ぼす影響は異なることが予想される。本研究においても、意味づけられたモデル刺激を提示されても、モデルとは関連しない自分なりのイメージを広げて描画する子どももいた。造形活動における幼児のイメージの広がりにも影響を与える様々な要因についてさらに検討することは今後の課題である。

## 引用文献

- Bresler, L. (1993). Three Orientations to Arts in the Primary Grades : Implications for Curriculum Reform *Arts Education Policy Review*, 94, 6, 29-36.
- Goodenough, F. L. (1926). Measurement of Intelligence by Drawings. (Measurement and adjustment series. Edited by Lewis M. Terman. World Book Company.)
- 日比裕泰(1994). 人物描画法(DAM):絵にみる知能と性格 ナカニシヤ出版
- 前村晃(1999). 造形表現活動の特質 『保育内容 表現 (第2版)』 黒川健一・小林美美編著 建帛社
- 文部科学省(2018a). 『幼稚園教育要領』
- 文部科学省(2018b). 『幼稚園教育要領補説』フレーベル館
- 若山育代(2007). 幼児の造形的なイメージの広がりを導く保育者の発話媒介行為の分析-既有知識と具体的対象の統合力に着目して- *美術教育学* 28, 397-411.
- Wallon, P. (2001) Le dessin d' enfant (邦訳, 加藤義信・井川真由美訳「子どもの絵の心理学入門」白水社, 2002)

## 付記

本稿は、2018年度に桑田美摘が高知大学教育学部に提出した卒業論文を基に、玉瀬友美が再分析、再検討したものである。